

トミー・ワンダー

# ミスディレクションは 存在しない

注釈：トム・ストーン



*Tommy Wonder's*  
MISDIRECTION  
**DOES NOT EXIST**

*with annotations by Tom Stone*

**ミスディレクションは存在しない**

～ 2002年6月に the Escuela de Magia で行われた特別ワークショップより～

著

トミー・ワンダー

注釈

トム・ストーン

訳

谷口和巖 滝沢敦

Published with explicit permission of the Tommy Wonder Estate.

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, including photocopy, recording or any information storage and retrieval system now known or to be invented, without permission in writing from the publishers.

© 2017 Tommy Wonder Estate & Tom Stone

© 2019 Realize Your Magic, LTD.

# 目次

序文	6
ミスディレクションは存在しない	14
イントロダクション	16
従来のアプローチ	16
これが最善の方法か？	17
船底の穴を塞いでいるだけ	17
ミスディレクションを自然に組み込む	17
研究	20
基本事項	20
積極的な意味の方がより効果的	20
興味を引く対象	23
継続的なディレクション	24
自分のマジックを信じる	24
ディレクションの力を信じる	26
注釈：ディレクションの力を信じる	29
ディレクションの具体例	32
意識の範囲を拡散させる	32
制御できないこと	33
待つ	34
注釈：待つ	36
小さく、短く	40
何も起きていないという錯覚	40

注釈：何も起きていないという錯覚	41
リラックスを使う時　まとめ	41
注目を集める	42
緊張と緩和の波	46
心理的ディレクション	47
時間的、空間的に離す	48
不意打ち	48
藁にすぎる	49
注釈：藁にすぎる	53
演技	56
注釈：演技	56
高度なディレクション・テクニック	56
電車のコンセプト	57
重層化	57
「電車のコンセプト」と「重層化」を繋げる	59
実践	60
解説してきたアイデアを使う	60
影を連鎖させる	61
調整	63
最後の仕上げ	66
まとめ	67
最後に	68

# 序文

2000年代の初め、友人であるピーター・ローゼングレン（Peter Rosengren）は、マジック・レクチャーによく見られる受動的でファストフード的な消費者精神にうんざりしていた。そこで彼は中間管理職向けの教育プログラムを作ってきた経験をもとに、マジシャン向けに実用的で実践的なワークショップを作る事を決めた。スライハンドのテクニックだけではなく、演出や個性を伸ばす方法、自己啓発について触れるワークショップだ。

我々に最も身近な教育モデルは「教え手／習い手」モデルだ。教え手が中心となり、自分の知識や知恵を習い手に与えていく。利点はあるが、これは主に子供や初心者に適した教育モデルである。習い手の知識が豊富で既にその分野に精通しており、時に教え手よりも経験豊富な状況では、物足りなかったり対立的に感じることもある。そういった状況では効果的な学習にはならないのだ。そこでピーターは長い時間をかけて、その分野のエキスパートに対する現代的な教育モデルを作った。それをスウェーデン・マジック界で1週間のワークショップという形で何度か試したのだ。効果は革命的だった。

3度目のワークショップ・シリーズは2002年に開催された。ピーターがワークショップの規模を大きくして国際的に有名なマジシャンを呼ぶことを決めたのがこの頃のことだった。そして彼は私にトミー・ワンダー（Tommy Wonder）を呼べないかと聞いてきたのだ。

トミーとは1996年の10月5日の夜9時あたりから友人だ。スウェーデンの南、ルンドで開催されたマジック・コンベンションでの話だ。トミーに彼のムーブやアイデアを盛り込んだカップ&ボール・ルーティンを見せても良いかと緊張を抑えながら勇気を出して聞いたのだ。彼は快く受け入れてくれた。すると、演技が終わるやトミーは私を真っ直ぐ見据えて「僕と一緒にオランダで仕事をしないか？」と聞いてきたのだ。私がとても動揺していたからか、彼は笑いながら「春にアムステルダムでコンベンションがある。面白いマジシャンを見つけてくるようにと頼まれているのだが、私のムーブを使って私を騙せる人なら問題無いだろう！」と続けた。この時から私達は友人になった。そしてもちろん、次の春にはアムステルダムに行った。スウェーデンから出て演技をしたのはその時が初めてだった。

話を戻すが、トミーにワークショップの話をする、とても気に入ってくれたようで、2002年の7月1日にスウェーデンに来てくれた。1週間にわたって開催されたそのワークショップの参加者は10人ぐらいだったのだが、そこで彼が行った講義の元になったのが、このノートの内容だ。この原稿はそのワークショップの1週間前にスペインで行われた“エスクエラ・デ・マヒカ (Escuela de Magica)”というイベントでも使われたもので、彼の著書からミスディレクションについての内容をまとめた物である。

残念ながらトミーはこのワークショップから4年後の2006年6月26日に他界してしまったが、この原稿だけでも作品として世に出す価値があると感じた私は、トミー・ワンダー・エステートに出版許可を求めた。そしてトミーの兄弟であるフランク・ベメルマン (Frank Bemelman) が寛大にも許可をくれたのだ。

ところで原稿を校正しながら、トミーがダリエル・フィツキー (Dariel Fitzkee) の "Magic by Misdirection" を強く支持していることに戸惑いを覚えた。というのも個人的にとっても酷い本だと思っているし、その本に書かれていることは「トミー・ワンダー風」なものの対極にあると感じてい





るからだ。そこでトミーの友人であるディック・コーンウィンダー (Dick Koornwinder) にフェイスブックで次のようなメッセージを送った。

トミーがフィツキーの "Magic by Misdirection" を “ミスディレクションについての著作として不朽の名作である” と言っているのが腑に落ちない。私はトミーの親友とは言えないかもしれないが、それでも長年連絡を取り合ってきた。ミスディレクションについて話し合った時に、ヴァーノンやスライディーニ、ゴッシュマン、タマリッツ、ネルムズや他のマジシャンの名前が話題に上がることは確かにあった。しかし、ミスディレクションの具体的な使い方について話している時にフィツキーの名前や彼のアイデアがトミーの口から出たことはなかったように思う。それに他の原稿や彼の2冊の著書の中ではフィツキーについて1度も言及していない。君とマジックの話をする時に、トミーがフィツキーのアイデアについて話すことはあつ





1週間ワークショップの参加者

ただらうか？ みんなが知っているあのアイデア（ring in ball of yarn）以外に。

ディックからの返信：

良い質問だ！ 少し考える必要がある…まとまったらメッセージを送ろう。しかし、この段階でこれだけは言える。トミーが若い頃にフィツキーの三部作で勉強した事は間違いない。

私の返信：

私も彼がフィツキーの本で勉強したとは思っている。僕だっけとしたしね！ 19歳か20歳の頃、皆が言うように深い知恵を学べると思って2年近く読み込んだ。しかし最終的に、学べるものは何もなく、自分のマジックに使えるものはないことが分かったんだ。フィツキーの何がトミーの心に残って、どうマジックに貢献したと思っていたのだ

ろう？ それとも単に懐かしくてフィツキー三部作が好きだったのかな？

数カ月後にディックから来た返信：

数日前、2002年のレクチャーノートに、トミーがフィツキーの "Magic by Misdirection" を評価している理由が伺える表現を見つけた。これについては君に一度も話したことがなかったから謝らなくてははいけない。彼はおそらく教育的な視点からフィツキーに触れたのだと思う。私と同じようにトミーもマジックの勉強をフィツキーやネルムズから始めたから、マジックを学ぶ初心者にとっては良い導入だと考えたのだろう。だがトム、トミーと知り合った時に君はもう初心者じゃなかっただろ！ そういうことさ。また、これは私の話の裏づけになると思うのだが、トミーは死ぬ前にある若いマジシャンに本の入った箱を遺していた。その中に "Magic by Misdirection" も入っていたんだ。

トミーがフィツキーの理論に言及した例は結局見つからなかったし、彼がフィツキーのことを高く評価した謎はここまでしか解けなかった。もしトミーがフィツキーの理論について語っているのを聞いた事がある人がいたら、是非教えて欲しい！

ワークショップの初日は参加者にとって辛い一日だった。トミーの膨大な知識が参加者を津波のように飲み込んで、4、5時間後には全員疲れきって顔が白くなっていた。トミー自身も疲れているようだった。彼は少し動揺した様子で私を脇に引っ張って「こんなに速く進むとは思ってなかった！ 初日なのにもう話すことが無くなってしまったよ！ 話したいことは全て話してしまった。まだ6日も残っているのに！」と言ってきた。もちろん、これには私も笑うしかなかった。慌てる彼を落ち着かせて「君がこの結論に至るまで、人生をかけて試行錯誤をしてきたはずだ。それを5時間話したくらいで、参加者がその知識や経験を吸収できると思うかい？ 彼らにとっては全て新しい話なんだぞ！ 君が最初に言った話でさえ理解しようと苦労してることだろうさ。私だってそうだ。明日になったら一からやり直そう。そして一つ話をしたら彼ら自身に試してもらって、次のテーマに移るんだ。大丈夫。絶



対に上手く行くよ！」と言った。

このワークショップが開かれた場所では、他にもワークショップや夏期講習が開催されていた。だからスウェーデンの田舎であるにも関わらずたくさんの人がいた。夕方は過ごしやすく人との交流も盛んだった。私達マジシャンも良い意味で注目を浴びる事が出来た。

ある晩、私はトミーに彼の本がいかに面白いと同時に腹立たしいかを話した。トミーは不思議そうに「腹立たしい？」と聞いてきた。私は「だって本当に素晴らしい現象の解説を読んだ後でページをめくると“後は、旋盤で寸法を合わせるだけ”とか書かれているんだ。“旋盤？ 旋盤だと！？ あのクソつたれトミー・ワンダーと奴のふざけた道具がまた出てきた！”となるからさ」と答えた。トミーはこれが非常に気に入ったらしく、ワークショップの間「クソつたれトミー・ワンダーと奴のふざけた道具」と呟いて笑っている姿を何度か見かけた。ところでワークショップが終わってから2週間ほどたったある日、木箱を抱えた配達員が私の家に来た。オランダから届いたその木箱を開けてみると中には旋盤と「これで君もふざけた道具が手に入ったわけだ。これで何が出来るか見せてくれよ！」という手紙が入っていたのだ。

ワークショップの初日が終わると、皆で外の庭に飛び出た。陽はまだ高く、優しい風が木の枝を揺らしていた。蝶が花の間を飛びまわり、ツバメは見えないほど空高く気持ちよさそうに飛んでいた。夕食まではまだ30分ほどあった。トミーは「次はどうするんだ？」と聞いてきた。私は真剣な顔をして「スケジュールによると、予定外のことをする時間だね」と答えると、トミーは「予定外？」と聞き返した。そこで私は彼の腕を触って「タッチ！ 君が鬼だ！」と言って子供のように走って逃げ出した。これは私の最も大切な思い出だ。それから30分間、トミーとスウェーデンのマジシャン12人は、スウェーデンの素晴らしい夏の午後、子供のように庭で鬼ごっこをしたのだった。

トム・ストーン

ストックホルム、2017年9月



# ミスディレクションは存在しない

このタイトルは、ただ単に皆の注意を引くための大胆な表現をしてみただけではない。実際、私はしっかりと構成されたマジックには本当にミスディレクションは存在しないのだと信じているのだ。というより、素晴らしいマジックの中ではミスディレクションは存在できない、と言った方が良くかもしれない。このノートを読み終わる頃に、ミスディレクションは存在するべきではない、という言葉の意味を理解してもらえていれば、嬉しい。説明するには少し時間がかかるが、楽しんでもらえると思う。ここで話す内容は、マジックを興味深く、面白く、美しくする要素の数々だ。

もちろんミスディレクションを使わないマジックを演じるのは難しいだろうし、不可能なときもあるだろう。ミスディレクションの存在を知っておくのは良いことだが、「ミスディレクションは存在しない」という私の考えに何かを感じてもらえたら、ぜひ身につける努力をして欲しい。

この旅に加わって楽しんでくれることを願っている。

トミー・ワンダー